【報告】プロジェクト科目「木暮人映画祭プロデュース」実施報告

Report on Project courses: Kogurebito International Film Festival

本プロジェクト科目「木暮人映画祭プロデュース」は、2013 年度にデジタルハリウッド大学大学院にて初めて導入した科目であり、本学院生に対しより実践的な研究・教育の場を提供することをその目的の一つとしている。第 1 回木暮人国際映画祭 2013 のプロデュース全体に本学院生達が深く関わり、本学が志向するビジネス・プロデューサー育成に寄与した。プロジェクト科目の実施状況と今後の課題を報告する。

吉田 就彦
Narihiko Yoshida

デジタルハリウッド大学大学院
教授

[Profile]
デジタルハリウッド大学大学院
教授　吉田 就彦
Digital Hollywood University, Graduate School
Professor Narihiko Yoshida

工学士（早稲田大学）。キャニオンレコード（現〈株〉ポニーキャニオン）で、音楽・映像・マルチメディアの制作・宣伝業務に 20 年間従事。制作ディレクターや宣伝プロデューサーとして「チェッカーズ」「おニャン子クラブ」「中島みゆき」「だんご 3 兄弟」など数々のヒットを手がける。映画プロデューサーとして「教祖誕生」「KAMIKAZE TAXI」なども制作。ネットベンチャーのデジタルガレージに転職後、EC 事業の立ち上げ、デジタル･マーケティング･コンサルや新規事業開発等を手掛ける。現在は、ヒットコンテンツ研究所代表取締役社長としてコンテンツビジネスコンサルと人材教育を手がけている。

【著書】ヒット学―コンテンツ・ビジネスに学ぶ 6 つのヒット法則（ダイヤモンド社）
アイデアをカタチにする仕事術―ビジネス・プロデューサーの 7 つの能力（東洋経済新報社）
大ヒットの方程式―ソーシャルメディアのクチコミ効果を数式化する（共著；ディスカヴァー・トゥエンティワン）

1. プロジェクト科目「木暮人映画祭プロデュース」実施の目的と背景

2013 年にデジタルハリウッド大学大学院（以下、「本学院」）にて初めて導入したプロジェクト科目は、既存の研究室活動及びラボ科目のカリキュラム体系と連携させることによって、本学院生に対しより実践的な研究・教育の場を提供することをその目的の一つとしている。

本プロジェクト科目「木暮人映画祭プロデュース」（以下、「本科目」）は、本学院内で公募された数科目の応募に対し、学内のプロジェクト科目選考委員会により採択された二つのプロジェクトの中の一つとして採択、実施された。

プロジェクト科目に本科目が採択された理由は、大きなイベントである第 1 回木暮人国際映画祭 2013（以下、「映画祭 2013」）のプロデュース全体に、実際にチームとして院生が深く関わる事が求められ、それに院生が答えるカタチで学びを深められる場が提供されることであり、それが実践的な教育を目指すプロジェクト科目の目的に合致するためである。

本科目は、参加する院生にとって単に座学の講義に終わるのではなく、本学院が志向するビジネス・プロデューサー育成に有効なプロデュース手法を取得するために、一定期間内に継続的にプロデュース活動を積み重ねることが可能な場として「映画祭 2013」を提供している。その成功のために本学院生に様々なプロデュース能力を発揮させる必要があり、その一連の過程の中でプロデュース手法を身に付けることが期待できる。

また、このプロジェクト科目の設置により研究活動費として 30 万円が認められたことは、本学の教育体系にとっては画期的であり、その予算措置により「映画祭 2013」のプレイベントとなる長野で開催された第 2 回木暮人祭り 2013（以下、「祭り 2013」）での活動等、首都圏外での活動が可能となったことは、実践的な活動に終始する本科目を遂行する上で非常に有効なサポートとなった。

2. 一般社団法人木暮人倶楽部及び木暮人映画祭について

本科目は、「祭り 2013」及び「映画祭 2013」を主催する一般社団法人木暮人倶楽部 (以下、「木暮人倶楽部」) の協力により実施されたプログラムである。以下に活動の背景となる「木暮人倶楽部」及び「祭り 2013」、「映画祭 2013」の詳細を示す。

2.1　木暮人倶楽部について

木暮人倶楽部は、森林や木とともに暮らしている日本全国の森林・林業関係者～建築・木工関係者～研究者～一般市民までの様々な人が、お互いに森林や木に関する情報を共有しあうことで、森林や林業に関わる人から、それを享受する一般市民までの暮らしを、「天然志向の木」により、健康的で豊かにすることや素晴らしい「日本の木の文化」を後世に伝える活動を通じて、林業の健全な発展と森林の保全と保護、及び育成に寄与することを目指して設立された一般社団法人であり、その設立目的は以下の 3 点である。
①さまざまな団体や個人と連携して、素晴らしい「日本の木の文化」や「天然志向の木」の良さを社会に広める。
②一般市民と森林・林業関係者及び木造建築・木工関係者等の森林や木に関わるすべての関係者の情報を繋ぎ、林業の健全な発展と人が木とともに暮らすより良い環境の醸成や森林の保全と保護及び育成に寄与する。
③森林・林業に関するさまざまな情報やその研究成果を社会に広め、「日本の木の文化」や「天然志向の木」に関する一般市民の興味を喚起し、木材需要を促進する。

このように、木暮人倶楽部は、森林や木に関する様々な活動を通じて社会にメッセージを発信している団体であり、本科目で取り組む「映画祭 2013」も、この木暮人倶楽部の理念が色濃く反映されるべきイベントであり、そのようなプロデュースの方向性を本学院生は求められることになる。

また、木暮人倶楽部の理事長は吉田就彦であり、吉田が主宰するデジタルハリウッド大学大学院吉田就彦研究室森林・林業研究部会は、木暮人倶楽部の参加団体として活動していることから、研究室との連動で本科目の設置が可能にもなった。

2.2　第 1 回木暮人映画祭について

「映画祭 2013」に先立って、2012 年 9 月に行われた第 1 回木暮人祭りと併催された映画祭が「第 1 回木暮人映画祭」である。この映画祭で上映された映画は、劇場用の本篇映画 3 本であり、いずれも木暮人映画祭のコンセプトである森林や木に関係するテーマを持っている映画である。このような森林や木に特化したテーマを持った映画だけを上映する映画祭は、これまで 2011 年の国際森林年等の記念年でイベント的には行われてきたものの、恒久的に行う事を目指して立ち上げられた本木暮人映画祭は、世界初のコンセプトと言える。

上映された映画は下記の 3 本である。
●劇場用映画「森聞き」
　4 人の高校生が木や森の匠の 4 人のおじいちゃん、おばあちゃんに話を聞きに行き成長していく感動のドキュメント。柴田昌平監督作品。平成 23 年児童福祉文化賞受賞。
●劇場用映画「鬼に訊け～宮大工西岡常一の遺言」
　法隆寺最後の宮大工故西岡常一棟梁の貴重な仕事映像ドキュメント。西岡の「永遠なるものへの想い」、「木との対話」を記録した本作は、我々が顧みることのなくなった根源的な日本人の有り方に再び目を向け、心の復興を願う「祈り」のドキュメンタリー映画。山崎佑次監督作品。
●劇場用映画「道～白磁の人」
　第 2 次世界大戦下の朝鮮で木を植え続けた朝鮮人と日本人の二人の男の物語。日本統治時代の朝鮮半島で植林事業に勤しみ、民族間で争いあう中でも信念を貫いて生きた実在の青年・浅川巧の半生を描いたドラマ。監督は「光の道」「火火」の高橋伴明。キャスト；吉沢悠、ペ・スビン、他。

このような森林や木に関わるテーマの作品を上映するコンセプトで立ち上げられたのが木暮人映画祭であり、「映画祭 2013」も同様なコンセプトをベースにしている。

2.3 「映画祭 2013」と「本科目」の取り組み

第 1 回木暮人映画祭は、参加者に好評であったものの上映された作品がすべてすでに劇場等で公開された劇場用本篇作品であったことから映画上映会としての性格が強く、本来、木暮人映画祭を開催する目的の社会に対するメッセージ性が弱いことから、木暮人倶楽部はテーマを絞って一般からショートフィルム作品を募集し上映する映画祭とすることを検討し、「映画祭 2013」では、2012 年に木暮人祭りと併催した映画祭を単独で東京にて行う事となった。この事により、院生によるイベント・プロデュースを実践・体験する科目として本科目の設置が可能となった。

前述した学内選考を経て、学内で本科目が採択されたことで、科目履修生のメンバーに中国、台湾を含む海外からの留学生が多数参加することとなり、作品募集を募る対象国を日本国内に限定せず、特に中国を意識して広く海外にも作品募集を広げる事が可能となった。結果、中国から作品がエントリーされたことで「映画祭 2013」は、国際映画祭となった。本科目が木暮人映画祭へ関わったことにより実現したこの拡がりは、「本科目」の成果の一つであり、「映画祭 2013」への大きな貢献となった。

このように、院生が実際に「映画祭 2013」のプロデュースに関わるメリットは、学ぶ場としての院生側のメリットに留まらず、「木暮人倶楽部」側にも及ぶこととなり、今後、国際映画祭を続けていく限りは、恒久的な相互コラボレーションに発展する可能性がある。

3.「映画祭 2013」概要

「映画祭 2013」の概要は、下記のとおりである。

3.1　第 1 回木暮人国際映画祭 2013 概要

●タイトル：第 1 回木暮人国際映画祭 2013
●日時：平成 25 年 11 月 24 日（日）
　開場 9:30　開演 10:00 終演 17:00
●場所：港区立神明いきいきプラザ体育館
　東京都港区浜松町 1-6-7　03-3436-2500
　http://www.toratopia.com 最寄駅；JR 浜松町駅より徒歩 5 分
●主催：一般社団法人木暮人倶楽部
　（ホームページ　http://www.kogurebito.jp ）
●共催：港区立神明いきいきプラザ
　（ホームページ　http://www.toratopia.com）
●後援：林野庁、港区、公益社団法人日本中国友好協会、一般社団法人 BCI 戦略研究所、一般社団法人日本林業経営者協会、デジタルハリウッド大学大学院
●協力：株式会社ヒットコンテンツ研究所、オフィス･カレイド、NPO 法人シネマ産業創造研究所
●イベント内容 (敬称略)
　9 時 30 分　開場
　＜開催挨拶＞ 10 時～ 10 時 10 分
　一般社団法人木暮人倶楽部理事長　吉田就彦
　＜来賓挨拶＞ 10 時 10 分～ 10 時 30 分
　林野庁森林整備部部長　本郷浩二
　NPO 法人東京都日中友好協会理事長　永田哲二
　＜第 1 部＞ 10 時 30 分～ 15 時 30 分
　エントリー作品の上映と関係者のティーチイン
　エントリー作品「木の部門」7 作品、「林の部門」4 作品、「森の部門」7 作品の全 18 作品
　＜第 2 部＞ 15 時 45 分～ 17 時
　木暮“shake”武彦 LIVE with 自然映像 by 映像作家中野裕之
　各賞の発表及び表彰式
●入場料；無料
●動員数；登壇者・関係者含め延べ 100 名程度が参加
●参加者；木暮人倶楽部関係者、林業関係者、木工事業関係者、木造住宅関係者、建築家、映画監督、映画プロデューサー、映像系クリエイター、学生、森や木に関心のある一般人、地域住民等二十代若者から大人の老人までの男女が幅広く参加

3.2　エントリー作品及びティーチイン登壇者

●＜木の部門＞ 7 作品
「フラクタル」（ドキュメンタリー日本）
制作・企画・監督・音楽・構成；尾中謙文
「曽根蒔絵工房 ～ Deep in Japan ～」（ドキュメンタリー日本）
制作；榎田竜路
「黒澤桐材店 ～ Deep in Japan ～」（ドキュメンタリー日本）
制作；榎田竜路
「関美工堂～ Deep in Japan ～」（ドキュメンタリー日本）
制作；榎田竜路
「橘街道プロジェクト」（ドキュメンタリー日本）
制作；榎田竜路
「ボクと木」（ドキュメンタリー日本、タイ）
監督；スティポン・K
「瞑」（ドラマ中国）監督；王亮

●＜林の部門＞ 4 作品
「DOUBLE HUNTING」（CG アニメーション中国）
監督；黄成希
「『みちのく丸』を操る木暮人」（ドキュメンタリー日本）
監督；伊藤光彦
「『木の国』木を植えよう！ 木を使おう！」（ドキュメンタリー日本）
株式会社 TREE 製作
「祭りの宴～木暮人祭り 2013」（ドキュメンタリー日本）
監督；狩野マコト

●＜森の部門＞ 7 作品
「熊出没」（CG アニメーション中国）
監督；丁亮
「木とともに暮らす明るい未来～シンポジウム森編」（ドキュメンタリー日本）
監督；辺見一平
「木とともに暮らす明るい未来～シンポジウム木編」（ドキュメンタリー日本）
監督；辺見一平
「木造和船文化を伝える木暮人」（ドキュメンタリー日本 / 中国）
監督；周恩生
「アクロバットマン」（ドラマ日本）
監督；売買キカン
「熊野・ちかの 平安の郷（ドキュメンタリー日本）
株式会社 TREE 製作
「the rainmaker」（ドキュメンタリー日本）
監督；長岡真一、制作；榎田竜路

＜ティーチイン＞（敬称略）
第 1 回ティーチイン
フラクタル監督；尾中謙文 /
橘街道プロジェクト他制作；榎田竜路
第 2 回ティーチイン
DOUBLE HUNTING 監督；黄成希
第 3 回ティーチイン
祭りの宴～木暮人祭り 2013 関係者；長野県木材協同組合連合会理事長 細川忠國
第 4 回ティーチイン
木造和船文化を伝える木暮人 出演者；神奈川大学大学院教授 昆政明 /
木とともに暮らす明るい未来～シンポジウム森編 出演者；森林セラピー専門医 落合博子
第 5 回ティーチイン
the rainmaker 制作；榎田竜路 /
アクロバットマン監督；売買キカン

3.3　各賞審査結果

当日の会場来場者の一般人及び関係者の当日鑑賞後投票により、以下の各賞が決定し、賞品が授与された。

●＜授賞作品＞
グランプリ：「ボクと木」（ドキュメンタリー日本、タイ）
監督；スティポン・K
木の部門賞：「フラクタル」（ドキュメンタリー日本）
制作・企画・監督・音楽・構成；尾中謙文
林の部門賞：「『木の国』木を植えよう！ 木を使おう！」（ドキュメンタリー日本）
製作；株式会社 TREE
森の部門賞：「熊野・ちかの 平安の郷」（ドキュメンタリー日本）
製作；株式会社 TREE

グランプリの「ボクと木」には、副賞としてウッドメイクキタムラ製作のヒノキのアタッシュケースと協賛社賞として富士見パノラマリゾートからトマトジュース「風立ちぬ」1 ケースが授与された。
また、木の部門賞、林の部門賞、森の部門賞の各作品には、萌工房製作の木のオルゴールが授与された。

4. 本科目の実施状況

本科目で実施したプロデュース活動は次のとおりである。

4.1　シラバス

本科目のシラバスは以下のとおりである。

351　2013年度プロジェクト科目　　***木暮人映画祭プロデュース（PJT科目）***

●単位:2単位
●履修区分:選必
●履修年次:1・2年次
●時間割:6/17開講　2～3Q　月曜2限
●定員:5名

担当教員
吉田　就彦

授業概要
一般社団法人木暮人倶楽部（理事長　吉田就彦）が主催する第2回木暮人映画祭をプロデュースする科目。本年度の第2回木暮人映画祭は、「ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア2013」と連携して、ショートフィルムを広く一般から募集し、本年秋に上映映画祭を行う。これら一連の映画祭の運営をプロデュースすることで、映画祭の運営ノウハウの会得や様々な外部との折衝等を体験することで、プロデュース業務全般の実務を経験する。
講義は定期的に行うのではなく、実際の現場やそれを行うための各種会議の中で行われるので、時間に余裕のある院生のみ参加可能。吉田就彦研究室森林・林業研究部会とも連動。
＜一般社団法人木暮人倶楽部概要＞
日本の**書**からあった木と人との付きあい方を再認識し、伝統ある「日本の木の文化」とありのままの「天然志向の木」の素晴らしさを未来に伝えることで、林業の活性化と森林の保全・育成・開発を促進する為に、山から一般消費者までの様々な人々が集まり、イベントや専門部会等を通じて活動している団体。
現在、北は秋田から南は福岡までの150会員社が参加。デジタルハリウッド大学院吉田就彦研究室としても会員になっている。
＜第1回木暮人映画祭概要＞
昨年の第1回木暮人映画祭は、「森聞き」「鬼に訊け！」「道～白磁の人」の劇場用映画を木暮人祭りと併催して上映。

到達目標
大きなイベントを成功させるためのプロデューサーとしてのスキルを身に着けることを目標とする。

履修条件
上記のとおり講義日程を設定しているが、基本的には講義時間内での活動は月一程度で、あとは実地で行うため、
履修者の条件としては時間に余裕があり、プロデュース業務に興味とやる気がある院生が条件。履修希望者が定員を超過した場合の選考方法は面接。
活動はメンバーが決定次第開始し、6月に予定されているSSFFや9月22日～23日の木暮人祭りにも参加のこと。
事前に説明会を開催。

評価方法
自らが作成した宣伝計画の動員人数やパブリシティ・プラン等の計画の達成状況、及びイベント報告書での評価。

教材・教科書・参考資料等
第一回木暮人映画祭のホームページ（http://www.kogurebitoclub.com）及び一般社団法人木暮人倶楽部のホームページ（http://www.kogurebito.jp）、ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア2013（www.shortshorts.org）を参考にすること

主な内容

回数	日程	時間	授業タイトル	授業内容
1	6/17	20:45～22:15	木暮人映画祭のコンセプト	木暮人映画祭のコンセプト固め
2	6/24	20:45～22:15	昨年の実績評価	昨年の実績を評価し、本年度の計画を練る
3	7/1	20:45～22:15	ショートショートFFとの交渉	ショートショートFFとの調整・交渉
4	7/8	20:45～22:15	ショートショートFFとの交渉	ショートショートFF映画祭との折衝で映画祭のノウハウを勉強
5	7/15（祝）	20:45～22:15	木暮人映画祭作品収集①	木暮人映画祭作品収集業務と通じてプロモーションやクリエイターのネットワーク作りを実施
6	7/22	20:45～22:15	木暮人映画祭作品収集②	木暮人映画祭作品収集業務と通じてプロモーションやクリエイターのネットワーク作りを実施
7	7/29	20:45～22:15	木暮人映画祭企画立案	木暮人映画祭企画立案業務により映画祭全体計画特にプロモーション・プランを作成
8	8/5	20:45～22:15	プロモーション実施①	プロモーションプランに沿ってのプロモーション実施及び進捗チェック（特にソーシャルメディアやマスコミ対応）
9	8/19	19:00～20:30	プロモーション実施②	宣伝計画書進捗会議
10	8/26	19:00～20:30	プロモーション実施③	宣伝計画書進捗会議
11	9/2	19:00～20:30	プロモーション実施④	宣伝計画書進捗会議
12	9/9	19:00～20:30	プロモーション実施⑤	宣伝計画書進捗会議
13	9/16	19:00～20:30	プロモーション実施⑥	宣伝計画書進捗会議

・9/21　10:00～　木暮人祭り準備設営（合宿泊り）※一部不参加
・9/22　08:00～　木暮人祭り本番（合宿泊り）※一部不参加
・9/23　08:00～　木暮人祭り本番、後片付け東京戻り※一部不参加

回数	日程	時間	授業タイトル	授業内容
14	10/7	20:45～22:15	プロモーション実施⑦	宣伝計画書進捗会議
15	10/14	20:45～22:15	プロモーション実施⑧	宣伝計画書進捗会議
16	10/21	20:45～22:15	プロモーション実施⑨	宣伝計画書進捗会議
17	10/28	20:45～22:15	プロモーション実施⑩	宣伝計画書進捗会議
18	11/4	20:45～22:15	プロモーション実施⑪	宣伝計画書進捗会議
19	11/11	20:45～22:15	プロモーション実施⑫	宣伝計画書進捗会議
20	11/18	20:45～22:15	プロモーション実施⑬	宣伝計画書進捗会議

・11/23　15:00～24:00　木暮人映画祭リハーサル
・11/24　08:00～24:00　木暮人映画祭本番及び後片付け

※以降、イベント報告書作成（12月いっぱいを目途）

デジタルハリウッド大学院
DIGITAL HOLLYWOOD UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL

4.2　本学院生の関わり方

本科目を履修した本学院生は、伊藤光彦（リーダー）、大池康人、辺見一平、スティポン カノックル アンロン（タイ）、周恩生（中国）、李琳琳（中国）、滕飛（中国）、史沢飛（中国）、張栩揚（中国）、陳哲民（台湾）、蘇筱媛（台湾）、姜江（中国）の 12 名であり、最後まで履修を続けた本学院生はそのうち 9 名である。

また、「祭り 2013」には、本科目と連携する形でラボ履修生の中国留学生 2 名も参加した。
「映画祭 2013」で、院生が具体的に関わったプロデュース活動は次のとおりである。

4.2.1　宣伝計画作成及び宣伝活動実践

「祭り 2013」及び「映画祭 2013」に来場者を集客するために、宣伝計画書に宣伝コンセプトとともに履修院生各自が自分で実施できる具体的な宣伝活動を書き込み、各自が個別に宣伝計画書を作成し、その宣伝計画書に基いて、各自が様々な形の宣伝活動を実践した。

具体的には、クリエイティブ系の大学等の教育機関に「映画祭 2013」への作品募集のチラシを配布の上、学内での掲載を依頼し、映画館、ライブハウス、Cafe 等のサブカルチャー系の客が多く集まる場所には集客用のチラシを配布した。
「祭り 2013」の宣伝に関連しては、長野県の TV、ラジオ、新聞へのパブリシティの実践を行なった。会場視察時に行なわれた長野日報社の取材では、視察に参加した本学院生も写った写真が新聞に掲載された。（写真 1）

また、作品募集では映画関連雑誌「月刊シナリオ」への告知掲載を行ない、中国留学生は、「映画祭 2013」への作品募集と「映画祭 2013」のイベント告知を中国の大学等の教育機関とコンテンツ製作会社及び Web メディアに行なった。

当初の宣伝計画を履行しながら、状況に応じて宣伝方法やアプローチ対象を変えていくことは通常のプロデュースでは当たり前であり、ほぼ 2 週間に 1 度の定例会議で進捗を確認し必要なら修正していく作業により、本学院生は具体的な宣伝の方法を体得していくことになった。

そのような経過の中で追加的に実施した宣伝には、大人数が集まるコミックマーケットにてチラシを配布したことや木の関連団体をリサーチしアプローチを行ない集客チラシの配布を行なったこと、イベント会場の神明いきいきプラザ発行イベントチラシにて、「映画祭 2013」及び同ビルにあるギャラリーを利用しての関連イベント「ギャラリー展示木暮人倶楽部」の掲載告知などがあり、文字通り本科目の目的であるプロデュース手法の実践的な場となった。

また、林野庁や港区の後援名義の取得や中国からの留学生が多くプロデュースに参加したことにより公益社団法人日本中国友好協会からも後援を取得し、関係者への周知も行なった。

長野日報
7月17日 水曜日
15年に茅野市民館10周年
記念プロジェクト 検討開始
木に触れ親しもう
9月22、23日富士見で「祭り」
風文工藤大輝とフラメンコ
21日に原村で共演
環境改善の問題議論
女子バレー部
副顧問に復帰

写真 1　長野日報の事前パブリシティ（7 月 17 日掲載）© 長野日報社

4.2.2　エントリー作品募集

「映画祭 2013」への作品エントリーを促すため、本学院及び他クリエイティブ系教育機関に対し、「映画祭 2013」の趣旨を説明後チラシの学内掲載等の協力を依頼した。また、本学院生の個人的なネットワークを活かすことにより、自分の周りの関係者に打診してエントリー作品を収集した。その結果、中国から 3 作品がエントリーされる成果を得た。

4.2.3　作品制作によるエントリー

「映画祭 2013」へのエントリー作品集めと共に、本学院の特性を生かして履修院生自らも映画を制作しエントリーを行なった。その際に本学院生は、各種引用資料保有団体への利用申請許諾作業、関係者への取材依頼打診、取材実行、製作後の確認等の一連の作業を行い、映像作品の製作業務の実践的なプロデュース方法も学んだ。

「祭り 2013」では、映画製作のために会場を訪れた一般人や出展者へのインタビューを行なったことで、本学院生は木暮人倶楽部への理解をさらに深めたことにより、「映画祭 2013」のプロデュースに有効な情報を得ることができた。

また、中国からのエントリー作品には上映に必要な字幕入れ作業や解説文の翻訳等国際映画祭の運営に必要な一連の作業を学んだ。

4.2.4　会場設営から当日の運営

会場である神明いきいきプラザは多目的体育館を劇場仕様に変更することで上映会場となることから、事前のリハーサルを含む打ち合わせ及び会場の設営からイベント当日の運営に本学院生が大きく関与した。上映プログラムの決定、各賞の投票のシステムの決定及び集計、映像作品の上映、イベント進行、会場の原状復帰の一連の作業を本学院生全員で手分けをして実施した。

5. 参加院生の成果

エントリー作品は全部で 18 作品であり、そのうち 9 作品はなんらかの形で本学院生が関わった作品である。「映画祭 2013」は、本学院生のプロデュース作品のアウトプットの場としても機能したと言える。また、前述のように、海外からの留学生が参加したことで、作品を日本だけでなく他の国からも集めることができたのは、本学院生が参加したことの大きな成果である。

「祭り 2013」は、2 日間で約千人の動員があり大盛況となった。また、「映画祭 2013」は初めての試みにもかかわらず多彩な観客を集客でき約百人の集客を達成した。

6. 参加院生の感想

本科目に参加した本学院生の事後レポートから、本科目の意義を述べる。

「日本語を用いて、チラシの設置や作品の誘致の交渉をすることは非常に大変なことであったが、達成感も大きかった。」（中国人留学生）。『自分が「意識」をし、頭を使って考えることによって学びのチャンスや日々の生活を変えていくことができる（プロデュースすることができる）。』（中国人留学生）。「今までの自分とは違った価値観を持つ沢山の木暮人と出会い、一緒にイベントを作っていくことで、自分の中に引き出しが増えた。」（日本人院生）。「自分から積極的に関わらないと、何も楽しめないということを学んだ。」（中国人留学生）。

このように、本科目のような実践的な教育プログラムの履修でしか可能にならない自らが主体的に関ったプロデュース体験は、院生の中に達成感を生み、チームが共同で作業する体験が高い学習効果を生んで、プロデュース手法の体得及び実感に繋がったものと評価できる。

7.　本科目の今後と課題

以上の様に、本科目は、新しい試みとしての実践的なプロデュース手法教育の取組として一定の成果を上げたといえ、専門職大学院としての本学院の学習体制に一つの方向性を示した。

木暮人倶楽部という団体とのコラボレーションにより実現した本科目であるが、今後このような外部とのコラボレーションによる実践的な学びの場は、院生に対して継続的に提供していくべきと考える。実践的な学びの中で取得したプロデュース方法は、院生の今後に大きな自信も与えられたのではないかと考える。

今後は、本学においてさらなる実践科目の発展が期待されるが、2014 年度はプロジェクト科目の発展的解消により、研究室活動が実践的教育の中心的な場となることになるが、本年度の成果を踏まえて、更なる実践科目の体系化と構築が今後の課題である。

また、木暮人祭り及び木暮人国際映画祭については、吉田就彦研究室の森林・林業研究部会が中心となり、ラボ科目履修者及び本学内のスタッフ公募により、昨年の実績を踏まえて「木暮人祭り 2014」及び「木暮人国際映画祭 2014」として 2014 年度も開催の予定である。